

【論文】

『源氏物語』に表現された紫式部の教育論

中島美代子^①

一 はじめに

近・現代で、問題にされている若者の教育について、それぞれ考え方もあろうが、一〇〇〇年前の教育はどうであったか。

『源氏物語』の中において、紫式部は若者の教育はどうあるべきだと考えて、どう表現しているのだろうか。平安時代の世界で、紫式部の考えを追って考え方を考察する事にした。『源氏物語』には四七六人の登場人物がいると、今井源衛氏は、ある講演の中でおっしゃった。五四帖の中の登場人物が多いのは周知の事実である。そもそも『源氏物語』は、フィクションによる小説であるから、これが作者の教育論だと断って出てくるものではないかもしれない。ただ登場人物の台詞や行動によって、紫式部はこう考えているに違いないと、分析し、考察する。

二 女子の教育について

①、物語の性格上どうしても登場人物は女が多い。まず、女の子について作者はどう考えているかを

考える。

A 幼子の躰と教育

まず女の子の教育を作者はどのように考えているだろうかという事から調べてみた。

この当時は、現代のように、学校がない。大学寮と言う学びやがあるが、これについては貴族の男子についての論で述べることにする。

子どもには、色々なことを家庭で教えた。実際『源氏物語』において、光源氏が若紫に教育する所をのべてみよう。

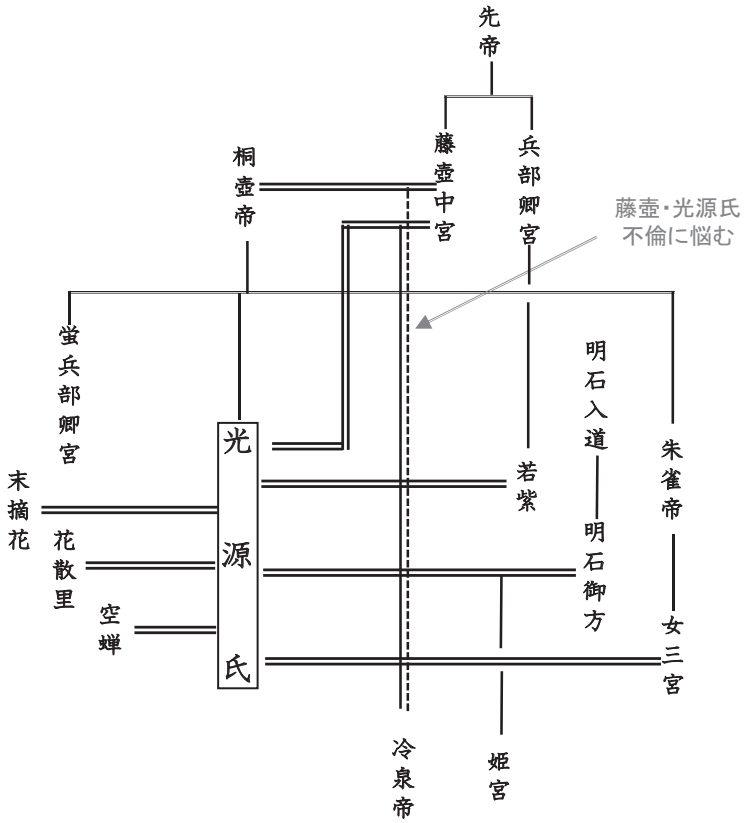
若紫は「十ばかりにやあらむ」と見える頃、はじめて源氏の眼に入った。そして色々ないきさつをもって、光源氏の家に住むことになった。光源氏と若紫は親子のような間柄となっている。

光源氏の理想の女性は、憧れの藤壺である。しかし、藤壺は父の妻、光源氏にとっては継母に当たる。堂々と恋人関係にはなれない。

系図(図)に参照しているが若紫は藤壺の姪にあたる。光源氏は彼女を藤壺の様な素敵な女性に育てた。藤壺が素敵だからと言って同じようにはできない。この当時は一夫多妻という習慣があり、一人の男性が、色々な女性と必要以上に親しくなることはありうることであった。しかし、いくら光源氏でも義理の母とそういう関係にはなれない。

若紫は、まだ子どもである。親を亡くし、祖母も亡くし、実の父親にはあまり構われていない。故に、若紫を自分の家に連れて帰って来るのが一番よいと光源氏は考えた。それならば、自分で教育をせざるを

人物関係図



えない。あくまでも自分で教育をするなら、自分の好みにあわせて育てようとしている。つまりは「藤壺のような素敵な女性に育てるにはどうしたらよいか」これが光源氏の希望であった。乳母達はハラハラしながら光源氏と若紫の関係を見ている。

光源氏は若紫に

夜は

「もう赤ちゃんではないのだから、少納言の乳母とは寝ずに一人で寝なさい」と諭し、又、

「女は心柔らかなるなむよき」とも教える

事実、光源氏を取り巻く女性を考えると、正妻、葵の上は気が強く近寄りがたい、次に居座る六条御息所もプライドが高く扱いにくい。最近知り合った夕顔は心優しい女であったが、なにがしの院に泊まりに行った時物の怪にとりつかれて急死してしまった。故に光源氏の周囲の女性を考えて「心柔らかな女性、」を強調したかったのであろう。

光源氏はこうも言う。

手ならひ・絵などさまさまにかきつつ見せたてまつりたまふ。の文の次に

「きみも書きたまへ」

と若紫に字や絵を書かせようとする。

「まだようは書かず」

と、本人は上手には書けない、と、しぶるが、

「よからねど、むげに書かぬこそわろけれ。教へきこえんかし」

と何度も書くことがよいと、練習させる。このころの若紫の字が

「生ひ先見えて」ふくよかに書いたまへり。

とあり、きつと上手くなる。と期待が持てる字や絵であった。

全てに「生ひ先見えて」を練習し、その上心柔らかなる女性に育て、字・絵・その他のことでもすばらしい女性に育てたい、と光源氏は考えた。

こうややっているいろいろな練習事をさせる。書くことについては何度も書かせて上達させる方法を取っている。

「ものを覚えさせる、書かせる、と上手くなる。練習は積むべきである」

これが紫式部の教育のやり方の一つだと考えられる。これは現代でも通じることである。

(以上 若紫の巻 より)

B 教養と常識

次は末摘花とのやりとりである。

末摘花には両親がいない。幼くして、両親を亡くし、家庭で色々な事を教えてくれる人がいない。生活の事は両親健在の頃からいた女房達がいる。しかし、この女房達も、若い者は、今日一人、又一人と主替

えをして、他の家に雇われて、一人又、一人と末摘花の家からいなくなってしまう。

末摘花は琴が上手だった。末摘花の家から琴の音が漏れてくる。顔は見えないが、どんな素敵な女性が爪弾いているだろうかという音を出した。おそらく両親のどちらかが存命の頃、伝授したに違いない。その琴の音に引かれて、光源氏が訪れた。だんだん親しくなつて、光源氏は泊まっていくようになる。しかし末摘花は無口で、なかなか話をしない。きつと育つ途中、会話のあり方を教えてくれる人がいなかったのである。無口であるばかりでなく、手紙もうまく書けない。これも同じである。

実際は光源氏が訪ねてきて、あくる朝自宅へ帰ると、光源氏から後朝の文が来る。末摘花は返事を書かねばならない。何と書いてよいか分らない。

後朝の文とは

この頃は夫婦と雖も特別の事情が無い限り同居はしない。それで、夫は、午後九時頃、妻の家に訪ねてきて泊まる。翌朝、明るくなる寸前に妻の家を出て夫は自宅に帰る。招婿婚というが、これがこの時代の習慣であった。婚約期間中は夕方六時頃訪ねてきて、几帳又は御簾越しに話だけして、顔も見ずに九時頃、男は自宅へ帰る。これが習慣であった。几帳の前で真面目な話をするだけで男は自分の家に帰るのである。几帳面な話という言葉の語源のように・・・その後、正式な夫婦になつて、男が泊まって行くようになれば、夜訪ねて来る。あくる朝、どんなに愛し合つていても東雲の頃、夫は自分の家に帰る。妻の家からいなくなる。普通はこれが習慣である。

「晝ばかり憂きものはなし」といったのも、妻と別れ、自分の家に帰る夫の辛さ、一方では、妻は晝頃迄、待つていても、とうとう夫が来なかつた、という例があるが、その悲しみの表現として時と場合によつて

両方の解釈が出来る。泊まった夫からは、翌朝必ず後朝（きぬぎぬ）の文が妻に届く。この文が遅いのは愛情が薄いと判断された。

末摘花は後朝の文の返事が書けない、末摘花には、自宅の女房の中で一番若くて、末摘花と仲のよい女侍従という女房がいたが、その女房に後朝の文の返事の下書きを代筆してもらい、清書だけを自分で書く始末である。

ある日、末摘花の所に光源氏が泊まりにきた。あくる朝光源氏が自宅へ帰ろうとしたら雪が降っていた。端近く（現代で言う縁側近く）で

朝日さす軒のたるひは解けながらなどかつららの結ばほるらむ（朝日がさす軒のつらは溶けたけど、どうして氷が凝固するようにあなたは心を閉ざしていらつしやるのでしょうか）

と光源氏が呼びかけた

末摘花は

「む、む、む、」とうち笑ひて、いと口重ねなるもいとほしければ、光源氏は（何も言わず）出でたまひぬ。

そして光源氏が出て行く時、雪明かりで末摘花の顔をみた。

「ふりにける頭の雪を見る人も劣らずぬらす朝の袖かな

若きものは形崩れず。」（白髪頭のような降りそそいだ雪を見る人も、老人に劣らず涙で濡らす今朝の私の袖です）

とうち誦し給ひても、鼻の色に出でて、いと寒しと見えつる御面影

ふと思ひ出でられてほほ笑まれたまふ。(ほほえむと表現されたら、この時代では苦笑と取るがよい。普通の微笑むはうち笑むと表現する)

とあり末摘花の鼻が赤い事をはっきり意識したのは雪明かりであった。

また、末摘花が着ている物の、センスの無さ、いくら寒いからといつてもひどかったので、光源氏は黒貂の皮ならぬ絹、綾、綿など、老人どもの着るべき物の類、かの翁のためまで上下思しやりてたてまつりたまふ。

と、屋敷内の人の着るものまで心配して贈るほどであった。

それから光源氏は、気楽に付きあうが、末摘花を少し低く見るようになってい

ということは、話し方、身に付ける物について家庭で教えてくれる人がいるということであったなら末摘花はこれほど、みじめな格好をしてはいなかったであろう。又、親がちゃんと見守っていたら、これほど非常識でもなかったであろうと考えられる。

後日、宮中の御宿直所にいる光源氏にあてて、末摘花から、手紙が来る。

陸奥紙(この紙は恋愛の相手に手紙を書く紙ではない。)しかも、厚肥えた紙に匂いばかりは深くしめていた。(普通、恋文なら薄様の紙を使う)しかも字だけは大変上手く書きあげている。

それはわろき戒めとなっている。歌も

からごろも君が心のつらければおも袂はかくぞそぼちつつのみ(あなたの心は薄情に思いますので袂はこうも涙に濡れるばかりです)

このような手紙が来たからには何かプレゼントが入っているはずだと、探してみると、包むのに使う布を下に敷いてその上に手紙を置いて、渡してきた。

光源氏はこの非常識さに、大変驚いた

これをいかでかはかたはらいたく思ひ給へざらむ（これをおかしいと思わない者がいようか）

心配する女房たちは光源氏にこの手紙と包んだ布をみせまいとするが、結局光源氏はこの手紙を見た。その時この手紙を見て末摘花の本質を知った光源氏は

ひきこめられなむはからかりなまし……」（手紙をかくしてひっこめてしまうわけにはいかな
いでしよう）

と言つて他に何も言わなかった。

また、

なつかしき色ともなしに何にこのすゑつむ花をそでに触れけむ

色濃き花と見しかども

光源氏がこのように後悔するシーンもあるが光源氏は末摘花のことを老後までしっかりと面倒をみる。

このように、常識のない末摘花がここに表現されている。しかし作者は、親がいたならば又末摘花にすこ
しでも、「なにか教えた」という事があつたならば、

心くるしの世やといたうなれてひとりごつを、よきにはあらねどかうやうのかいなでにだにあらま
しかばと、かへすがへす口惜し。「胸のつまる間柄です」と馴れた感じでひとりごとをいうのだが
「うまくはないけど、せめてこれ位の出来ばえがあつたなら」と残念に思う）

と残念がる。

ここで作者の考え方だが、教えてくれる親の無い女を例にして、

「常識の無い女は面白くないし、容貌まで悪く感じる」と作者が言いたいのだという事が分かる。末摘花が面白い話でもできたら、会話が続きいたら、光源氏との恋を失う事は無かったと信じる。女は親になっても賢く常識的でなければならぬ。と考えたのが作者の教育であつた。

(以上 末摘花の巻 より)

C 空蟬について

うちとけたりし宵の側目には、いとわろかりしかたちさまなれど、

もてなしに隠されて口惜しうはあらざりきかし

と光源氏は言っている。美人ではないがいやだとは思わなかつた。むしろいい女だなど思った、と。教養の美が形をカバーして、内面が外形に出ると言っている。容貌じゃない教養がだいじだ。と述べているのである。

この段落でも女は見かけではないと述べている。

(以上末摘花の巻 より)

D 花散里について

この人も美人という描写は無い。

光源氏が花散里に夕霧の母代わりの世話を頼む所がある。現在夕霧は、祖母である大宮たちと住んでゐる。光源氏は親として、学問をさせるには静かで人すくなる所に夕霧を住ませたかった。夕霧十二才になり元服後の話である。

つぎは夕霧の言葉であるが、

大宮（自分の祖母）は尼君でいらつしやるけど、まだ大変お美しくいらつしやる。と評判である。

夕霧は、花散里のことを

ほのかになど見たてまつにも「容貌のまほならずもおはしけるかな。

かかる人をも人は思ひ捨てたまはざりけり。」など、「我があながちに、つらき人の御容貌を心にかけて恋しと思ふもあぢきなしや。こころばへのかやうに柔らかならむ人をこそあひ思はめ」と思ふ。

（中略）

大宮の容貌ことにおはしませど、まだいと清らにおはし、ここにもかしこにも人は御容貌良きものとのみ目馴れたまへるを、もとよりすぐれざりける御容貌の、ややさだ過ぎたる心地して、痩せ瘦せに御髪少なるなどが、かく誇らはしきなりけり。

といわれる花散里を光源氏が

もてなし粉らはしたまふめるも、むべなりけりと思ふ（後略）

訳の要点「御父さんの愛する人はみんな顔や見かけが良いのに、この人は違うな。御父さんはどうしてこの人を愛したのだろうか、何かいいところがあるのだろうか」

と夕霧が思うシーンがあるが、所謂美人ではなかったのだ。しかし心の中の良いところを印象つける作者はこの人についても、「女は顔じゃない」と、言っている。

(少女の巻 より)

E 明石の御方について

後に明石御方が出てくるがこの人は父明石の入道が、「娘は皇統の人でないと、絶対に結婚はさせない。それじゃなければ、海に入って死ね。」と教育している。

光源氏は、須磨に行つて夢のお告げによつて、明石の国に行く。すると、明石の入道から「娘を是非もらつてくれ」とせがまれる。光源氏は京都に、最愛の紫の上を待たせているので結婚はしたくない。

ところが、ある日、明石の入道の招きに従つて明石の御方と逢う。

会つてみれば隙のない明石の御方は、美的ものごし・教養・字・音楽など全て優れている。音楽、特に琵琶の弾き方は光源氏をうならせた。

父明石の入道は、

「延喜の隠手より弾き伝へたること三代になりはべりぬる。」

と明石の入道が光源氏に告げているように、醍醐天皇以来の伝承がある事が明石の入道の誇りであつたので、

「この琵琶の弾き方は天皇家から自分が習つた。それを娘に教えた」

と述べている。皇統に伝承されているのは薫物もそうである。末摘花の所で、陸奥紙に香りをつけていると述べたが(末摘花の巻)この香りもそうである。

末摘花は、常陸の宮の子であり皇統の出身という事に設定されているからである。

やはり親の教育がここにも明らかになされた。教育によって子どもが伸びていく。というのである。

(明石の巻 より)

F 女三宮の場合

朱雀院は、愛している末娘の女三宮の後見を光源氏に託す。光源氏は躊躇らいながら、兄の言うことを聞く。紫の上は光源氏が、女三の宮と結婚する事に衝撃を受ける。しかし、嫁として受けざるを得なかった。

三月、六条院で若者が庭で蹴鞠をしていた。その仲間に柏木が加わっていた。

部屋の中にいた猫が毬の動きによって動いた。その時、柏木は女三の宮を垣間見る。

ネコの動きを見ていた他の若者たちは女三の宮の女房たちの心遣いの浅さを疑う者もいた。猫の動きはわからないにしても、姫の座り場所などに心配りがない。

部屋を取り仕切る女房の教育が手薄だと。

(若菜 上 の巻より)

G 女子の教育はどうあるべきか

総じて紫式部は「女は顔じゃない、本人の心が柔らかで、常識的なら非常にいい。家庭で子どもにもものを教える事が子どもの教育には一番いい。」

と言いたかったのである。それから女の子ばかりではないが、源氏物語を読んでいると、いたるところに

でてくる言葉は「ねびまさりけり」「おいなりにけり」という言葉である。「年を取ってますます良くなった。」「育って行くうちに自然とよくなる」とでも訳す事が出来る。女は教養と性格、常識的な行動が大切だと、紫式部は源氏物語の中で、述べている。

三 男子の教育について

A 次に考えられるのは男子の学問はどうあるべきか。

光源氏の息子、夕霧が元服（成人式）をすることになった。元服は、各家庭によって、何日に元服の式をするかは親が決める。

夕霧は光源氏の子であるから元服は大宮の家、葵の上が生きている時住んでいた家、（故葵の上の実家）つまり夕霧が暮らしている三条殿で取り行われることになった。ここには、葵の上の両親、兄、その他従兄弟に当たる人々が住んでいるので、皆、元服のイベントに参列するだろうということは、光源氏は承知している。

葵の上（夕霧の亡くなった母）の兄である御伯父の殿はら、みな上達部のやむごとなき御おぼえ異にてのみものしたまへば、主人方にも、我も我もと、さるべきことどもは、とりどりに、仕うまつりたまふ。

とあるように誠に盛大な式典になってしまっている。

元服の時は夕霧の位が決まる。これは光源氏が決める。四位・五位・六位のどれかを当てるはずである。人々は、光源氏の大臣が位を決める役だから夕霧が四位になるのかと、期待した。(この位は家に着くのではなく個人に着くのである。)

光源氏の政治力からいえば、人々は夕霧を

「四位になしてむと思し、世人もさぞあらむ、「四位だろう」と思へるを、まだいとまきはなるほどを、我が心に任せたる世にて、しかゆくりなからむも、目馴れたる事なり、と思しとどめつ。浅葱にて殿上に還りたまふを、大宮は飽かずあさましきことにおぼしたるぞ、ことわりにいとほしかりける。

浅葱色の上着を着るといえば、六位である。四位、五位、六位とどれかもらえたのに、六位とは皆びつくりした。最下位ではないかと。

(大宮は光源氏との) 御対面ありてこのこと聞こえたまふに、

「ただ今、かうあながちにしも、まだきにおひつかすまじうはべれど、思ふやうはべりて、大学の道にしばし習はさむの本意はべるにより、今二・三年をいたづらの年に思ひなして、おのづから朝廷にも仕うまつりぬべきほどにならば、今人となりはべりなむ。

自らは、九重の中に生ひ出ではべりて、世の中の有様も知りはべらず。夜昼御前にさぶらひて、わづかになむ、はかなき書などの才をまねぶにも、琴・笛の調べにも音堪えず及ばぬ所の多くなむはべりける。

といひながら、自分のことを）及ばぬ所が多かった。例えばたいしたことのない親に賢明な子が勝る例は、本当に稀なことです。と共に、立派な親に大した能力の無いそれも、努力をする気持ちもない子が親と共に、立派になっていこう、とするのも無理がある事です。と作者は言わせている。

高き家の子として、官爵ここ雄にかなひ、世の中盛りにおごり馴らひぬれば、学問などに、身を苦しめむことは、いと遠くなむおぼゆべかめる。戯れ遊びを好みて、心のままなる官爵に昇りぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろぎをしつつ、追従し、気色とりつつ従ふ程は、おのづから人とおぼえて、やむごとなきやうなれど、さるべき人に立ちおくれ、世衰ふる末には、人に軽め侮らるるに、とるところなきことになむはべる。才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ。

「名門の御曹子として、官位も思い通りになり、この世の栄華を奢ることに馴れてしまいますと学門には関心が無くなり、戯れ・遊びを好みて、心のままなる官爵を得てしまいますと、人々は内心では笑いなから追従して来るようになる。立派な人のように見えるが、時代が変わり運勢が衰えたら、人々から軽蔑されるようになる。」

「やはり、学問の才能を基礎としてこそ、仕事の実務が世間で有用とされる傾向も強い」
「将来、私が（親が）いなくなっても安心のように。親がいる間は何とか面倒みますが」
と、親の力でしか生きて行かれぬ子どもにしたいくないと強調するのである。

（少女の巻より）

この時代、権力者の子弟の我がままや横暴さが世の中を困らせた話が色々な形で、世間を騒がせたようである。

この件に関しては、繁田信一氏著の、

『殴り合う貴族たち・平安朝裏源氏物語』と言う本に詳しい。

紫式部の訴えが『源氏物語』においてはここに言われている。

夕霧は元服十二才と言う設定である。光源氏は我が子に、この年で学問をやり、真面目に政治家として独立して欲しかったのである。十二才というと、現代に置き換えるなら小学六年生である。

当時大学寮では何を教えたか、

大学寮とは律令制で式部省に属し、官吏養成機関。

漢文・七才から十才になると、はじめて漢籍を読む儀式

「読書始め」ふみはじめ「算」を行う

幼学書『和漢朗詠集』・『論語』・『孝経』

文章博士が「侍読」という役を務め、「御注孝経序」を読みあげる。そして、尚復という名の復唱する役の者が、復唱する。光源氏は七歳で読書初めをする。聡明さは父、桐壺帝が不安を感じるほどであった。(当時も余り賢い子・美しい子・は早く神に召されるといわれていた。あまりにも可愛い子にゆゆしというのはこの所以である。)

実際の教科は 紀伝・明経・司法・算道

文章博士・助教らが教える。

河海抄によると、村上帝・七才 一条院・・・七才

陽成帝・・・九才

学令Ⅱ大学「定員四〇〇名」十三才以上十六才迄の五位以上の子弟
在学期間九年

雨の夜の寝定めで左馬頭が「三史五経を語り明かす・・・」
といっている。

三史・・・史記、漢書・後漢書

五経・・・春秋・礼記・詩経・尚書・易経

教科書 他に和歌・手習い・音楽・舞・芸事

本文を読むと、夕霧は祖母大宮邸と父光源氏の六条院に毎日、挨拶して政務に向かう様に書いてある。
この件に関しては、渋谷栄一氏の論文を見つけた。

「作者（紫式部）はどのような時代が来ても、

『才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる』様な人に、

ということはこの書を書いたのである。（渋谷栄一『光源氏の教育論』より）

（以上 主に少女の巻を中心に）

四 最後に、自分で考えよという事

気分の良い折がなく、何カ月もお過ごしだった藤壺の院が亡くなった。

三十七才だった。当時三十七才といえは女の厄年であった。陰陽道の数え方だが、厄年は 十三才・二十五才・三十七才・四十九才・六十一才・八十五才・九十九才・があげられるが、時代により、地方により少しずつ異なるようだ。ちなみに、還暦六十才・古希七十才・喜寿七十七才・傘寿八十才・米寿八十八才・白寿九十九才・茶寿一〇八才・皇寿百十一才・頑寿百十九才と言われているように人々の寿命が短かったともいえない。

藤壺自身は今年はどう持ちこたえられないと考えていた。冷泉帝は父桐壺院が、亡くなった時は東宮であつたが幼かつたので、人の死というものについての感覚は薄かつたが、この時は十四才という年齢設定であるので、母の死についての悲しみは深い。光源氏も又泣き暮らしている。権力に合わせて、盛大で類を見ない仏事供養を昔の天皇達はしたが、藤壺は年爵・御封の事など心のこもったことばかりしておられたので分別の無い山伏などまで盛大というより悲しみをもって藤壺を惜しみ申し上げた。

仏事が済んで諸事が落ち着いて、帝は心細く思つて一人仏壇の前にいると、御祈祷の師で朝廷にも信頼のある僧がやってきた。この僧は「夜居の僧」の役目もしていたので、宮中の事は全て知っている。

「今は、夜居などたえがたう覚えはべれど、仰せごとのかしこきにより、古き心ざし御添へて」と寄つて来たり

「いと奏しがたく、かへりては罪にもやまかり当らむと思ひたまへ憚る方多かれど、知ろしめさぬ

に、罪重くて、天の眼恐ろしく思ひたまへらるることを、心にむせびはべりつつ命終りはべりなば、何の益にかはべらむ。仏も心ぎたなしとや思しめさむ」

と遠慮がちに話し出した（大変申し上げにくいことですが、お聞かせしてかえって罪になるのではないかと思われる点がありますが、帝がこのことを御存知なければかえって罪が重くも怖ろしくもありますので、又私も不正直な僧だと思いになられますのでしようから申し上げます）

この当時は宮中とか高級貴族の家には「夜居の僧」がいて、ご主人様が夜寝ておられる時、物の怪が襲ってくるのを退治するという役目をしていた。相手が物の怪だとすると、一番効果があるのは法師の祈り・念仏であるからである。

「これは来し方行く先の大事とはべることを、過ぎおはしましにし院、后の宮、ただ今世をまつりごちたまふ大臣の御為、すべて、かへりてよからぬことにや漏り出ではべらむ。．．．（中略）．．． 仏天の告げあるによりて、奏しはべるなり。

（これは過去・未来にわたる重大事でございます。お隠れになった桐壺院、藤壺后宮、今世を治めていらっしゃる大臣光源氏様のためにこのままでは良からぬこととして世の中に知られてしまいますので、御仏のお告げのままに申し上げます。）

「帝父上は桐壺院ではなく、光源氏様です。」

「今まで忍び籠めたりけるをなむ、かへりて後ろめたき心なりと思ひぬる」

「さらに。なにがしと王命婦とより外の人この事の気色見たるはべらず」

「いときなく、物の心知ろしめすまじかりつるほどこそはべりつれ、やうやう御齡足りおはしまし
て、何事もわきまへさせたまふべき時に至りて咎をも示すなりよろづの事、親の御世よりはじまる
にこそはべるなれ。何の罪とも知ろしめさぬが恐ろしきにより、思ひたまへ消ちてし事を、さらに
心より出だしはべりぬること」

といいながら「帝は年齢的にも思考能力があるはずです。何事もわきまえていらつしやるだろう」とい
て「自分でどうすべきかを考えて下さい。」と促している。

時に冷泉帝の年令設定は十四才である。自分の事は自分で考える。いつまでも親を頼らない自立した若者
を作者は望んでいる。

(薄雲の巻より)

五 結論として

以上のことから考えてみると、若者の成長は現代も平安時代もそう変わらない。前述の夕霧の年は小学
校を卒業する年齢。冷泉帝は中学三年生の年齢。どちらも一人前を要求されるべき年である。

明文化されたのは江戸時代だと言うが、日本人における教育は三才で心を教え・六才で善悪を教え・九
才で挨拶を教え・十二才で文字を教え・十五才で物の考え方を教える。これが出来なければ子育ては出来
ないと言われている。平安時代の紫式部の考え方をたどってみると、

心柔らかなのが良い。練習は何回でも多くする。常識的に行動できる事が望まれる。親になったら子ど
もをきちんと教育できるよう自分も磨く。

学問は一生のうちで学べる特に若い時に学ぶ。親に頼ってばかりいれば、親が亡くなった時、本人に力がないと、何も出来ないし、人にも笑われる。特に親が実力を持っていたら親の力に頼ってしまう。若者は成長したら、学問をせよ。自分にとって大切なことは・又自分のことは自分で考えよ。そうすれば。「ねびまさる」「おいなりにけり」というように年をとったら人間はますます良くなるのだ。というのが、「源氏物語」の中に書かれた、紫式部の教育論である。

参考文献

- 『日本古典文学大系』（源氏物語一巻～四巻）一九九三年～一九九五年
岩波書店
- 『殴り合う貴族たち・平安朝裏源治物語』繁田信一 文芸春秋 二〇一八年
- 『源氏物語の観賞と基礎知識 少女の巻』至文堂 二〇〇三年

1 元九州大谷短期大学表現学科情報司書ワールド